

## 保育者の絵本選択の意図に関する研究Ⅲ

—「3びきのこぶた」の選択の推移—

和田 香 馨

(埼玉県立衛生短期大学)

【問題】 保育者は自分の目の前にいる子どもの心の状態をよく把握し、その心の状態と関連するような絵本を選択することが望ましく、そのような配慮のもとに出会った絵本は、子どもにとって、より意味有る絵本となるのではないかということを和田（1995）は示唆した。

また、残酷な場面のある昔話の絵本でも子ども達は好み、そして、その好みは自立性との関連があるのではないかということも和田（1996）は指摘した。

子ども達は絵本との出会いを通して、保育者との間で、子ども同志で、絵本との間で様々なやりとりをしながら、心の発達をする。

同じ題名の4種類の「3びきのこぶた」をめぐってどのように具体的なやりとりを展開していったのかについて検討を加えることが本発表の目的である。

【方法】 対象、研究期間、手続きは、全て1996年本学会発表と同じである。子供テスト、担当保育者に「3びきのこぶた」の意味することを伝える事を除く4つの手続きは自由記述による記録と共に、全てビデオによる記録を併用した。そこで、本研究では、子ども、ひとりひとりが自分自身の好きな絵本を選択して1対1で読んでもらう手続きを除く、3つの手続きのビデオによる記録を分析し、子どもの絵本への反応、保育者の絵本についての意識的な働きかけと子どもへの応答などを分析することによって、対象となった子ども達がどのような経過で4種類の絵本を選択していったかを検討した。

【結果】 （1）子ども達に好きな絵本を選ばせての集団での読み聞かせでは、担当保育者が今まで子どもたちに読み聞かせていた絵本Aを一番上にして、まず見せたり、選択されなかったのを惜しがっても選択されず、3種類読んだ後にC4が「やさしいから、これもみたいいな。」と言った。まず初めに、子ども達の選択は表1の様であった。子ども達はその時の雰囲気の中で反応どの絵本にも関心を示し、読んでもらうことを要求している。それに対応して保育者もいろいろな種類の「3びきのこぶた」があることを内容の違いを指摘して、子ども達に示している。

初めに読んだ絵本Bでは、煉瓦の家と初めて狼が黒

表1 3種類の絵本との出会い

| 絵本の種類 | 子 ど も                 |
|-------|-----------------------|
| 絵本B   | C3・ <u>C5</u> ・C7     |
| 絵本C   | C4・ <u>C6</u>         |
| 絵本D   | <u>C5</u> ・ <u>C6</u> |

いシルエットで登場すると、C2・C5・C7は煉瓦の家が好いと言った。

絵本Cでは、狼が初めてのこぶたを食べてしまうと、C5は「でもね、おおっきいのはだめだよ。」と言った。C3は煉瓦の家が出てくると、「このこぶたがいい！」と言った。最後に狼が鍋のなかに落ちたところでは、C5は「あら、水がいっぱい出ちゃった。」と言い、C7は「でもさ、ぶたがさ、のこってるよ。」と言った。

絵本Dでは、狼が2番目のこぶたが狼を家に入れること断る所で、C5は「だめなの。（家が小さくて）入れないから、だめだよ！」と言い、C6も同様に強く言った。最後に狼が煙突からはいて3番目のこぶたを食べようとする所では、C6が「たべられないやー。たべられない！」と言った。そして、最後に狼が鍋をかぶったまま、逃げて行く絵と並んで、隣のページに、3匹のこぶたが並んで描かれているのに、C6・C7は注目し、C6はそれを助けられたと説明し、C5はその具体的な方法を「おおかみと7ひきのこやぎ」のように「じょきと（お腹をきって）助けた」と言った。

次に初めて違う種類の3冊を読み終えて、それぞれの子ども達が関心を示したのは表2の様になった。

C7は「食べられないから」という理由を述べていた。

そして、担当保育者が、どの狼が一番恐かったのかを聞くと、絵本CとC5は言った。次に、絵本BとC6は言い、すぐにC6はそれを否定し「恐くない」と言い、C7も「恐くない」と言った。C3は絵本Aを、

表2 3種の絵本読後の絵本への関心

| 絵本の種類 | 子 ども              |
|-------|-------------------|
| 絵本A   | C4・ <u>C6</u>     |
| 絵本B   | C3・ <u>C6</u> ・C7 |
| 絵本C   | C5                |
| 絵本D   | C2                |

「恐そう」と言い、C6は「これも怖い」と言い、そして、再度、絵本Bが「怖い」と言った。絵本Dについては何も言わなかった。

(2) 担当保育者が好きな絵本Aを読み聞かせすると、子ども達は「めっそうもない」「ふうふうのふう」のところでは一緒に口ずさんでいた。その後、子ども達は他の3種類を読みたがった。初めて3種類の絵本を読んでから、3回、絵本Aを読んだのだが、その時、他の3種の強いリクエストがあったとのことだ。途中散歩にいき、そこで、3匹のこぶたの劇遊びをしてから、4冊目を読んだ。3種類の絵本をリクエストした子どもは表3のようになった。\*の子どもは言い出した子どもであった。

表3 3種類の絵本との再会

| 絵本の種類 | 子 ども                                          |
|-------|-----------------------------------------------|
| 絵本B   | *C7<br><u>C3</u> ・ <u>C4</u> ・C6・ <u>C8</u>   |
| 絵本C   | * <u>C3</u> ・*C5<br>C1・ <u>C2</u> ・ <u>C4</u> |
| 絵本D   | <u>C2</u> ・ <u>C8</u>                         |

劇遊びでは、食べられないこぶたを設定するとやっとC6が1番目のこぶたになるが2番目のこぶたになりたがらなかった。狼をC3がやった。2番目のこぶたは担当保育者になり、他児達はみな3番目のこぶたになった。しかし、劇が始まり、1番目のこぶたのC6が2番目のこぶたの担当保育者の所に逃げてしまうと、C3は劇を中断してしまった。

(3) 再度担当保育者が好きな絵本Aを選択し、読み

聞かせをした時には、その絵本を読むのを「だめ！」と子ども達は抵抗した。狼が3番目のこぶたを「食べてやる」の所では、C5が「食べないでね。」と言い、狼が煙突から鍋に落ちると、C5は「ぶたくんずるしてるね。」と言った。読み終わると「(ぶたくんが)ひとりだと泣いちゃう」と子ども達は言った。

その後、担当保育者が選択し絵本Bを読み、最後にC5・C3のリクエストで絵本Cを読んだ。この日は時間の都合で絵本Dは読まなかったが、C3・C6・C7が絵本Dのページを開いて見ていた。

【考察】 (1) 子ども達は新奇な物への関心が非常に強いと言える。しかも、全く新しいものではない新奇なものであったために尚一層、関心が高まったようであった。

(2) 子ども達が、こぶたや狼が食べられることに敏感に反応していることがよく解る。3番目のこぶたは食べられないということを既に知っている反応が多く見られた。

また、どの種類の絵本が怖い話であったかの判断も非常に微妙な反応をしていた。この時期の子どもではおとなの論理的な判断をする能力にはまだ至っていなく、絵本Bが怖いと言うようにおとなの論理では矛盾するような反応も見られるのだと考えられる。

絵本Aの読み聞かせをしたとき、子ども達はおだやかな表情で、「めっそうもない」「ふうふうのふう」のところを言っていたが、このことは怖いという思いを越えた、既になじみのある絵本との再会を楽しんでいるのではないと思われる。

しかし、子ども達の希望に反して、絵本Aを読んだ時には、こぶたや結末への批判が絵本Cを好むC5から出されてしまったが、これは、子ども達の欲求に添わない絵本であるとそのテーマが子ども達の心に伝わらない事を示していると言えよう。このときの絵本Aは子ども達にとって意味ある絵本ではなかった。

(3) 子ども達の狼に食べられることの嫌悪は劇遊びにも現れていた。しかし、食べられないと仮定して、1番目のこぶたとなったC6が2番目のこぶたとなった担当保育者の所に逃げて行ってしまうと、狼のC3はつまらなくなったのだろう。劇を中断してしまう。このことは、物語の展開としては、狼にこぶたが食べられないのは、迫力に欠け、面白味がないということを示していると言えるのではないだろうか。

(4) 自立性の一番高かったC5は絵本Cを2回選択し、その次に続くC1、C4も絵本Bを選択した時があり、やはり、自立性との関連が示唆される。